



研究主題

## 学びをたのしみ自律共創する子ども

期 日 令和5年2月18日(土) 9:00~17:00 (受付 8:15~)

開催形式 Zoomによるオンライン研究発表会

内 容 授業動画の事前配信・各教科等の分科会・講演

※感染症拡大等の状況により、開催形態を変更する場合がございます。変更が生じた場合は、本校HPにてお知らせいたします。  
※研究発表会でご視聴いただく授業の様子を、来校いただき参観できるように検討しております。  
詳細は研究発表会のご案内(二次案内)をご覧ください。

### 講師

香川大学 准教授 岡田 涼 先生

著書

- 『やる気をひきだす教師：学習動機づけの心理学』(金子書房)
- 『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』(北大路書房)
- 『教師として考えつづけるための教育心理学』(ナカニシヤ出版)
- 『子どもと大人の主体的・自律的な学びを支える実践』(福村出版)



### 附属小学校ホームページのご紹介 新しいコンテンツ 続々登場!!

#### ● 授業研究最前線

臨場感あふれる各教科の取り組みを随時更新します。

#### ● 実践・研究ブログ

校内で行われた最新の授業実践が掲載されます。



©2010熊本県くまモン

<https://elem.educ.kumamoto-u.ac.jp>

熊大附属小 検索

### 附属小学校SNS 今年度開設!!

本校の実践を SNS で発信しています。共に熊本の教育を充実・発展させていきませんか?

熊大附小公式 Facebook

熊大附小 LINE 公式アカウント



# 附属小 研究だより



研究主題

## 学びをたのしみ自律共創する子ども

### ご挨拶

8月18日に開催しました夏の実践研修会では、県内外から800人近くの多くの参加者にお集まりいただき、盛況のうちに研修会を終えることができました。ご参加いただきどうもありがとうございました。

今回の研修会では、「子どもとともに授業のヤマ場をどうつくるか」というテーマでのシンポジウム、「各教科等におけるヤマ場づくりのポイント」をテーマとした授業づくりセミナー、「学びの舞台づくりと末広がりの単元設計」をテーマとした京都大学、石井英真先生の全体講演を企画しましたが、いかがだったでしょうか。

まず、シンポジウムでは、「教科を横断したヤマ場の考え方がとても興味深かった。」「みなさんの前向きな実践がとても参考になった。」「子どもと作り上げていく授業の方向性を見いだすことができたように感じる。」、また、授業づくりセミナーでは、「子どもにとって身近なものをういた音楽づくりが大変参考になった。」「魅力ある教材の開発が、素晴らしかった。」「夏休み明けから実践できそうな内容でとても参考になった。」、さらに、全体講演では、「単元のヤマ場を意識した授業づくりについて、学術的な面から、具体的な詳しい話が聞けてよかった。」等の嬉しい感想をいただきました。一方で、「教科特有の部分だけではなく、教科を横断した内容がさらに聞けたらと思う。」「時間的に難しい面があると思うが、質疑(交流)の時間があると嬉しい。」等の課題となる意見もいただきました。

さて、令和5年2月18日の研究発表会においては、夏の実践研修会でいただいたご意見も参考にしながら、「学びをたのしみ自律共創する子ども」を研究主題として、授業実践による提案を行います。

皆様とともによりよい授業づくりについて協議できたらと考えておりますので、ご参会をよろしくお願ひします。

熊本大学教育学部附属小学校 校長 中野 浩幸

# 教科等研究紹介

## 学びにおける“3つの入り口”をデザインする



研究部長 溝上 剛道

子どもにとって「学び」とは。前回の研究日よりでは、遊びに没頭する中で対象世界を広げていく「発見と創造」の過程にこそ、学びの本質があると述べました。今回は、社会科・体育科の実践を基に、そのような学びの“入り口”をどうデザインしていくかについてご提案します。大切にしたいのは、対象世界・次の活動・対話への“3つの入り口”です。

### 1 「対象世界への入り口」をどうつくるか

社会科は「暗記教科」だ。一般的には依然としてそうした向きがあるかもしれませんが、学校現場ではそのような認識はほぼなくなってきているのではないのでしょうか。ただ、暗記ではだめだと思っても、「テストもあるし、押さえるところは押さえておかないと…」となってしまふことも少なくありません。村上教諭はそうした現状を受け、特に政治分野で「すでに政治的な判断によって完了した政策について学ぶような授業」が多いと指摘しつつ、「今ある課題と向き合い、よりよい未来を思い描きながら最終的な判断を下す経験」こそ大切だと主張します。これは、学習指導要領が求める「社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力」の育成という方向性とも合致するものです。ただし、現代的な課題を取り上げれば子どもはその課題と向き合うかと言えば、そう単純な問題ではありません。

そこで大切にしたいのが「対象世界への入り口」です。村上実践では、政治という子どもにとって馴染みの薄い世界に誘うための手立てとして、「題材選定とその出合わせ方」「実社会の人の立場に立つ主題設定」が挙げられています。「交通渋滞」の題材としての価値は、子どもの生活に根ざした現在進行形の課題だという点にあります。また「全国ワースト1位」という事実と、「都市建設局への提案」をゴールとするリアルな文脈も、子どもたちの探究心を掻き立て、自律的な学びへと誘うのに効果的でした。さらに、市役所職員や市議会議員の役割を設定して資料作成や議会質疑に取り組みさせることで、実社会の人の立場から社会的事象を多面的・多角的に捉え、社会とどう関わっていくかを再考する姿が生まれていきました。

### 2 「次の活動への入り口」「対話への入り口」をどうつくるか

体育科実践で注目したいのは「次の活動への入り口」「対話への入り口」です。第5時では「どこにパスをつなぐと返球する人が打ちやすくなるか」を全体の課題とし、試しの場やメインゲームでその解決に取り組みました。その上で、是住教諭は「試して分かったことやできたこと」に加えて「分かったけれどできなかったこと」を振り返るよう促しています。すると、子どもたちは「アタックの打ち方」「相手の返球に対応できるようなポジション」等に目を向け始め、それが次時の課題へと繋がっていきました。「次の活動への入り口」ができた瞬間だと言えるでしょう。

「前時の振り返りから次時の課題へ」という視点で見ると、実は第4時から第5時にかけても似た構造になっていることがわかります。第4時ではサーブの工夫を課題としたことで、その技能が向上し、逆にパスがつながりにくい状況が生じてきました。その際の振り返りが第5時の「どこにつなげばよいか」という課題へと繋がります。さらには試しの場における「対話への入り口」となっていったのです。

このように、前時の振り返りが次の活動や対話の“入り口”となり得たのは、「できなかったこと」「次に試したいこと」などを視点としたことが大きく関係しています。ただし、振り返りの視点は万能ではありません。そこから子どもの「今」をどう見取り、指導にどう生かすかが重要で、是住教諭は、一人一人の子どもが「今何に満足し、何に困っているか」を見取った上で、ゲームの様相の変化と学習内容を踏まえ、「サーブの工夫（第4時）」→「サーブ技術の向上でパスがつながらなくなる」→「パスのつなぎ方（第5時）」→「アタックの質に目を向け始める」→「理想のアタックを打つには（第6時）」という学びの文脈を、子どもとともにつくっていったのです。

### 3 「学びの入り口」としての授業デザイン

「学びをたのしみ自律共創する子ども」の育成に向けて、教師ができること。それは、子どもを対象世界へと誘いつつ、自律共創する学びを支える「伴走者」として学習環境をデザインしていくことです。そして、そのような授業の先にこそ、単元に閉じない本物の学びへの入り口が拓けてくると考えています。今後も実践を積み重ねながら、「学びの入り口」としての授業の在り方について研究を深めてまいります。

## 6年 社会 すこしやさしい熊本市をめざして「熊本市の交通とまちづくり」を提案しよう (わたしたちの暮らしを支える政治)

～子どもが自ら社会とかがわり続ける社会科学習～



村上 春樹

1 自分事として社会的事象の追究に向かうための対象との出会いと単元構成の工夫  
本単元のねらいは、政策の内容や実施までの過程、法令や予算との関わりなどに着目して、政治の取組を捉え、表現することを通して、国民の生活の安定と向上を目指して政治が行われていることを理解できるようにすることです。選挙権年齢が18歳に引き下げられたことから、主権者教育を進めるべく、6年生の社会科では政治先習となりました。しかしながら、一般的な政治単元においては、すでに政治的な判断によって完了した政策について学ぶような授業が散見されます。これでは、子どもたちの市政に対する思いや願いが授業の中で表出されることは少なく、今ある課題を把握し、解決に向けて考えていくような学びにはなりにくいと考えます。子どもたちは将来、マニフェストが課題解決に有効か、あるいは、優先して解決すべきことはその課題なのかを考え、投票しなければなりません。だからこそ、市民や行政の立場から今ある課題と向き合い、よりよい未来を思い描きながら試行錯誤し、最終的な判断を下す経験が必要だと考えます。そこで、本実践では、熊本市の交通渋滞の解消に向けて政策を考え、市役所に提案する活動を中心に以下のように単元を構成しました。

単元導入では、「熊本の交通とまちづくりシンポジウム」の動画の一部を視聴し、政令指定都市で熊本市が最も交通渋滞箇所が多いという事実を示しました。それによって普段、不満をもちつつも当たり前と思っていた交通渋滞に対して「どうにかしたい」という意欲が高まり、それが解決すべき課題となりました。そこで、「政策は誰が考えているのか」と問い、市役所の役割に目を向けさせ、市役所の方との出会いの場を設定しました。第2時には、住んでいる地区

ごとに班（中央区、西・南区、東・北区）をつくり、市役所の方に政策づくりのアドバイスをもらいました。その後、目指したい熊本市像や議会質疑を単元のどこに位置付けるか話し合い、「すこしやさしい熊本市をめざして『熊本市の交通とまちづくり』を提案しよう」という主題と単元計画を作成しました。第3時には、それぞれの地区の課題を明らかにしながら、渋滞解消に向けて政策づくりに取り組んでいきました。



市役所の方にアドバイスをもらう

### 2 対話を通して、社会的事象を多面的・多角的に捉える手立て

第4時、次時に議会質疑を控えた子どもたちは、提案する政策を一つにしぼる必要がありました。そこで、西・南区班の「多くの市民のために売り上げを基準に政策を行う場所を考えた」という前時の振り返りを紹介すると、各班が、判断基準となる視点を明らかにしながら話し合っていました。さらに、より客観的な根拠に基づいた政策へと向かわせるために、自分たちの意見だけでは政策を決めきれないと考えていた東・北区班の「一つ一つの道路の課題が大きすぎてしまへない」という発言を全体で取り上げました。すると、子どもたちは次のように語り始めました。

ゆうこ：道路の口コミを参考にしたかったけどないから、道路沿いの店の口コミを調べてみて、そしたら交通状況の口コミがあったから、そういうのを探したらどうかな。  
ひかる：口コミにこだわりすぎるのも…間違ってることもあるし。  
まりこ：自分以外にもその道路を使ってる人はいるから、最終的には他の人の意見も取り入れて考えたい。だって、自分の意見だけを通すつてなるのも、いやだし。だから、口コミに頼りすぎるのはよくないけど、頼らないとダメかなって思う。

このやり取りを通して、客観的な根拠を基にしながら政策を再考し始めました。その中で東・北区班では「アンケートをとる」という解決策を以下のような対話の中で生み出していきました。

# 自律共創する子どもたち

もつことができました。その後は、実際にゲームをしながら、ルールの確認や調整を行い、ゲームの面白さや難しさを自らの体でも感じることができるようになりました。

### 2 対話によって協働的に課題を解決していくためのかがわり合いを生み出す工夫

第2次では、仲間が取りやすいパスをするためのレシーブの仕方や意図をもってサーブをすることで得点につながりやすくなることを学習していきました。サーブの技能が向上してきたために、パスがつかず返球しにくくなったという振り返りがありました。そこで、第5時の導入では動画を活用し、パスのつなぎ方に焦点を当てながら全体でチームの困り事を共有していきました。子どもたちは次のように語り始めました。

ななみ：もっと前にパスしたらいいのに。  
T：どういこと？  
ななみ：みさきさん（第2触球者）がボールを後ろにやっているから、たけしくんがアタックしにくくて、ボールをもうちょっと前にやったらアタックが打ちやすいと思います。  
みさき：ななみさんが言ったように、動画では後ろにボールがいったけど、本当は、ちょっと前にもっていきかけた。

動画を活用して分析し、みさきさんが自分の思い描く理想のプレイについて発言したことで、アタッカーのボールの打ち方だけに課題があるのではなく、仲間とのパスのつなぎ方にも課題があることが顕在化していきました。そこで、動画を改めて視聴しながら、コート図にパスの軌跡を書き入れ、視覚化していきました。第2触球者がパスを後方に出しているという事実から「どこにパスをつなぐと返球する人が打ちやすくなるのか」を全体の課題として設定しました。課題に対して、それぞれに語り出していったため、チームごとに分かれ、どこにつなぐと相手コートに返球しやすくなるのかを動きながら試しました。動きを試した後にわかったことを共有する場を設定すると、以下のようなやりとりがありました。

りんか：前の緑のラインをボールが越えていたら、ボールを打っていいと思いました。

はやと：立体交差をつくることで周りの道がせまくなったたりするでしょ。人それぞれの天秤があって、交通渋滞の方が重い人もいれば、軽い人もいる。だからアンケートが必要かな…  
T：誰にアンケートをとるの？  
こみこ：その近くに住んでいる人とか。  
はやと：市のホームページでアンケートをつくって、「困っている人がいたらアンケートに答えてください。」みたいな。「もし、多いなら熊本市が検討して改善してまいります。」っていうのを作った方がいいと思う。

このようなやり取りを通して、子どもたちは市役所の立場から市民の思いや願いを大切にしたい政策の在り方について考えを深めていきました。振り返りには、「政策をつくるときは市民の意見も取り入れてつくっていかねければならないと気付いたので、私たちも政策に関係していると思った。」という記述もあり、今ある課題を解決するために政策を考える活動を行ったことで、自分と政策とのかがわりに気付く姿がみられました。

### 3 成果と課題

単元導入時に認識のずれが生じ、社会と関わりながら改善したいと思える社会的事象を提示したことで、単元を通して今ある課題を自分事として追究し、よりよい熊本市に向けて活動することができました。また、実社会の人の立場から社会的事象を多面的・多角的に追究していくような課題を設定したことで、葛藤を抱き、その解決に向けて協働的に活動する姿も見られました。しかし、グループ間でのかがわりについては課題が残りました。今後は、子どもたちがもっている視点や着目している問題などの変化を振り返りなどから見取るとともに、活動中心の学びの中で、個やグループへの関わり方や課題や解決方法を交流させる手立てについて研究を深めていきたいと考えています。



市民の思いや願いを大切に

こうじ：1回目の人がサーブを受けて、緑のラインより前にパスを出したら、2回目でも思いっきり打っていいと思います。  
たけし：打ちやすい状況だったらどンドン打っていいよね。  
T：打ちやすい状況ってどんな状況なの？  
CC：前にボールがあるとき！アタックしても入る場所！  
かおり：でも、ネットのギリギリだと打てないから…。  
さおり：近すぎたらネットに引っかかるから返せない。

打ちやすい状況がどんな状況かを問い返し、実際のコートを見ながら視覚的に「コートの前」という場所を共有したことで、「2回目でも打っていい」や「パスがネットに近すぎたら打ちにくい」という、よりよい返球をするための状況判断の基準を明らかにして、ゲームで試していきました。



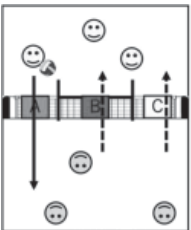
近すぎたらネットに引っかかる

授業の終末には、試してみてもわかったことやできたことだけでなく、わかったけれどできなかったことも振り返らせ、全体で共有する場を設定しました。すると、得点もつと決まるような相手のコートやネットに近すぎたら打ちにくいという状況判断の基準を明らかにして、ゲームで試していきました。

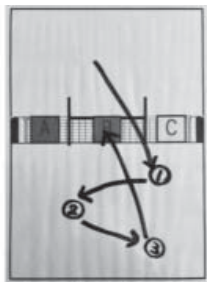
後ろの方に来た時は、なるべく前にパスして、打ちやすくなるというところがわかった。緑のラインに来たら打つのが（二人目でも）ベストとチームで考えた。チーム全体できていくけど、理想のアタックはできていないから次はそこを試していきたい。

### 3 成果と課題

ゲートを設置したことで、仲間とパスをつなぐ必然性が生まれ「どこにパスをすると仲間が打ちやすくなるのか」を自然と試行錯誤する子どもたちの姿が見られました。また、視覚的な手立てにより空間的・関係的な見方・考え方を働かせながら、よりよい動き方を追求することもできました。しかし、ゲートを設置したことで、「相手コートのどこをねらうとよいか」などの相手との攻防をたのしむ機会が少なくなってしまう場面もありました。今後は、学習内容を焦点化しつつも、ルールや場がシンプルでたのしめるような教材開発の要件を研究していきたいと考えています。



コート図



近パスの軌跡を示したコート図